

特定非営利活動法人

バングラデシュと手をつなぐ会

ミロン

No.107



「ミロン」は、一つになる、手をつなぐ という意味のベンガル語です。

バングラデシュと手をつなぐ会ホームページ：<http://bangla.nngo.jp>

■ アジアの子どもたちの未来のために ■

バングラデシュと手をつなぐ会へあなたも参加しませんか

バングラデシュと手をつなぐ会では、バングラデシュ・カラムディで
現地の村人による開発のための委員会「ションダニ・ションスタ」と
協力して【教育】と【医療】の分野で次のような支援活動を行っています。

教育の分野では

将来を担う子どもたちの
教育の普及と向上のために

- ① 小学校の建設 【1987～89年】とその後の運営支援
- ② 貧しくて学校へ行けない子ども達への奨学金制度
- ③ 職業訓練【ミシン】で技術を身につける
- ④ 教科書図書館【教科書が買えない中学生のために、
教科書の貸出】

医療の分野では

命と健康を守るために

- ① 母子保健センターの建設【1995年】とその後の運営支援
- ② 医療設備の充実
- ③ 緊急患者対応のために救急車の配備【1998年～】
- ④ 現地医師、看護婦のための訪日研修【1995年～97年】
- ⑤ 出産前女性への母親教室
- ⑥ 村の保健衛生向上のための巡回健診と衛生指導



国内活動では

夏の現地訪問、冬のスタディツアーを
毎年実施しています。

- ① 会報誌【ミロン】の発行
- ② 定例会の開催【参加型学習会など】
- ③ 現地訪問の報告会の開催、報告書作成と記録ビデオの製作
- ④ チャリティコンサートおよびバザー
- ⑤ 総会【毎年4月、予算・決算と活動方針やその決定など】

現地訪問報告!!

カラムディの状況や
初めて現地を訪れた若者の感想等々



保健医療活動の幅が広がる。

二ノ坂 保喜

2年ぶりのカラムディ村でのおどろき

今回の訪問でまず目に付いたのは、母子保健センターの建物が新しい産婦人科病棟も加えて充実し、庭に植えた木も大きく育っていることだった。また、センターの前の道路は、ドカン（店）が立ち並び、夕方になると多くの人が行きかう「繁華街」としてにぎわっていた。

もっと驚いたのは、母子保健センターを中心とする保健医療活動の広がりだった。

昨年現地訪問のあと、保健医療スタッフはいくつかの計画を立て、実行し始めた。そのひとつが、「地域コミュニティとの連携」だった。具体的にはいくつかのプログラムがあるが、そのひとつ、ナースによる周辺地域への巡回検診を紹介しよう。

母子保健センターは開設当初から、Community-Based Hospitalを目指して、村の中に出て行く巡回検診を行ってきた。これはカラムディ村の住民を対象としたもので、当初はナースが回っていたが、センターの仕事との関連や、ナースがなかなか定着しないことなどもあり、その後は村出身のソーシャルワーカーたちを育成しながら、彼女らに巡回検診をゆだねてきた。これは結構うまく行っており、現在では、ソーシャルワーカーの巡回検診が村の中では定着してきた。

トータルサポート

カラムディ村の周辺地域にも活動の幅を広げようと、数年前からサテライトクリニックを開設している。村以外の周辺地域10ヶ所あまりを設定し、月に2回地元の民家などを借りてクリニックを開設する。担当するのは、医療補助者やソーシャルワーカーで、その地域の妊婦検診や一般患者の診療を行う。サテライトクリニックも次第に定着してきている。それに伴い、サテライトクリニックにも通えない村人たちを対象に、巡回検診を昨年からは開始した。

カラムディ村の外に出て、しかも巡回検診を行うことは、大変な仕事だ。悪路をバン（日本のリヤカーみたいな人力の車）やバイクで目的地まで行き、各家庭を訪問する。時には、悪口を言われたり、相手がいなくなってしまうこともある。それでも、ナースたちは妊婦の家庭を尋ねて回り、子供たちの発育をチェックして回る。「患者さんや病気だけでなく、それを取り巻く家族や生活が見えてきたのが収穫です。」と彼女らは口をそろえる。

「トータルサポート」という言葉が今年はしきりに使われた。外来、フィールドに限らず、患者や病気だけに目を向けるのではなく、その家庭や生活の全体に目を向け、それをサポートしていくべきだ、という彼らの考え方を表したものだ。ソーシャルワ

一カやナースの訪問時も、妊婦や子どもの健康面だけに目を向けるのではなく、その家庭の全体の生活に目を向けるように心がけ、ションダニの生活改善運動や子牛の奨学金活動などとも連携して、家庭の生活向上につなげていきたいという。

在宅ケアをやっている私にとっては、心にすーっと入ってくる考えだ。患者を自宅でケアするという事は、その人の生活全体を支えることである。在宅ホスピスは、その人の人生の最期を支えることだ。いのちと生活を支えるという根本的な考え方で、ションダニの活動としっかりとつながっていることを感じる事ができた。

母子保健センターとスタッフの活躍

もちろん、村に出て行つての「フィールドワーク」ばかりでなく、中心となる母子保健センターの活動も報告に値する。昨年、産婦人科病棟が完成してから、カラムディ村だけでなく、近隣地域から出産に訪れる妊婦が増えている。毎月の出産件数は30～40件となった。安全なお産は、定期的な妊婦検診に支えられているが、これも順調に増加している。私たちの滞在中も、毎日出産が行われていた。ある朝の朝礼で、「昨日の出産は5件、待機している妊婦が2名います。」という報告があった。ナースたちはほとんど休むことなく一晩中、お産に取り組んでいたが、翌朝もさわやかな顔で出勤、仕事に入った。

2月から新たに、ラシエド医師が着任している。大柄で、やさしい表情が印象的だ。カラムディでの医療活動に共感を覚え、とてもやりがいがある、と語ってくれた。

2人の医師の真摯な態度と、ナースたちの巡回検診の効果もあって、外来患者は月600人を超え、これまでの最高記録を達成している。僻地の村の病院で患者数が増加していることは、病院の内容、スタッフの質が認められていることだと考えられる。


現在は、センターの外来・入院部門と、フィールド部門とがうまく連携しており、ションダニの運営委員や事務局とも「チーム・スピリット」でしっかりとつながっていることを感じる事ができた。

これからの課題も

しかし、やはりこれからの課題も多い。

急速なインフレで、物価が上昇し、スタッフの給与が追いつかない。このままでは生活が困難になるスタッフが出てくる可能性がある。また、新たに看護師を募集しているが、現在の給与ではとても応募がないという。母子保健センターとションダニの保健医療活動の充実にとって、スタッフの充実・定着は念願だが、これからも頭を悩ませそうだ。

村に出て行つての活動も、まだまだ地域コミュニティの意識や行動の変容をもたらすまでには至ってないようだ。母子保健センターに頼るのではなく、自分たちの健康、自分たちの生活は自分たちで守る、創る、という意識を共有できるようになるには、まだ時間がかかることだろう。


 カラムディ村の教育

ラフマン・モクレスール

シONDANIのジレンマ

バングラデシュと手をつなぐ会の最初のプロジェクトは奨学金制度である。1990年から2006年まで17年間で延べ1,070名の生徒に奨学金を支給してきた。その内訳は中学生898名、高校生119名、大学生53名。そのほか個人的に奨学金を出したこともある。年間平均63名。同じ生徒が数年にわたって奨学金をもらっているのも、上記の数に延べ数として加算されている。基本的に特別な問題がない限り中学校入学時から卒業まで同じ生徒に継続的に奨学金を支給する方針。現金奨学金に加えてまた2002年から子牛奨学金制度も始まり、現在70名の小・中学生がその恩恵を受けている。この数は一つの地域にとって大変大きなものだと認識している。しかし今シONDANIの中では、今までのやり方に少し疑問の声が上がっている。児童生徒・学生たちは奨学金をもらって学校に通うが、学校で本当に勉強ができていないか、子どもたちが学校卒業後、家庭の経済困難解放に役立っているか、子どもたちの教育を現存の学校に任せて良いのか、今年現地訪問中にこのような疑問があがった。

90年代半ば頃からカラムディ村の学校数も必要以上に増えた。現在、国立小学校が1校、教育委員会承認の学校が2校（これらの学校の教員には国立学校教員の給料の90%ぐらいが支給される）。そのほかサテライト小学校が1校、未承認の小学校が1校、中学校や女子中学校、高校がそれぞれ1校ずつ、そしてマドラサ（宗教教育学校）も1校ある。また母

子保健センターの前に完全私立学校がひとつできている（学校というべきか疑問がある）。どの学校にも生徒数は多く見られ、校舎も教員もいる。しかしよく耳にするのは教員の指導力の不足や生徒の質の問題。また教員の絶対数も足りないのが事実である。そして何より深刻な問題は教員の真剣さや誠実さ。

教室や教員数が足りないという理由で、児童生徒の登校時間が2部制になっている。小学校I・2年生は9:30から12:00まで。ほとんどの学校には入学前児童の（日本の年長組に相当する）クラスが一つある。3・4・5年生の授業時間は1時から3時半まで。また30分の休憩もある。結局子どもたちは学校に2時間しかいない。ほとんどの小学校には教員数は4名。教員3名の学校もある。授業開始時間は9時半となっても、ほとんどの学校は10時から始まると聞いた。

現地訪問中、カラムディ村から約15キロのところにあるサテライト・クリニック訪問を終えた帰りに突然近くの小学校を訪問した。分かったことは、4名の教員の内、校長は公用でガンニ教育委員会に出張（本当は違う理由だった）。もう1人は病欠（本当は前日に病院に行って疲れているので休んでいる）。残り2人の教員で6クラスも担当。このような状況が続いて、学校の本来の目的は達成するのかと疑問に思った。

私が感じた疑問はその後シONDANIの会合でも浮上した。教育は今、経済的

に余裕のある家庭の子どもだけのものなっている。つまり、学校で足りない勉強を家庭教師や塾で補う。(先進国においても同じことであると反論されるかもしれない)。教育は学校が責任を持って行うものではなく、親が責任を持って家庭で行うものだという考えが定着しつつある。そのために親は生活費を節約してでも子どもに家庭教師をつけている。このようなことは以前は都会に限っていたが、今は地方にも一般化されつつある。今年2月に行われた日下部氏や宇治氏の調査でも明らかになったように、子牛奨学金対象家庭の半数以上は家庭教師を雇っている。この事は一方では、子どもの教育に対する親の関心度、他方では学校に対する親の不信感を意味する。家庭教師を雇えるほど経済力のある家庭はこの問題を自分の力で解決できるが、経済的に困難な家庭は学校任せにせざるを得ない。また奨学金受領者や子牛奨学金を受けている子どもの家庭は社会の弱者であり、社会の底辺に位置している。一日を過ごすのが精一杯。親も教育を受けてないのでどのように子どもの教育に取り組めばいいかわからない。ほとんどの場合、子どもの勉強部屋がないし、もしかすると教科書がなく、あっても帰宅後一度も本を開くことはないだろう。その結果、子どもの学業成績が悪く、進学が難しく、ドロップアウトすることもしばしばある。しかし親は子どもがホワイト・カラーの仕事に就くのを待ち望んでいる。(2005年8月にラフマンと日下部氏が行った調査では90%以上の親が子どもにホワイト・カラー(サラリーマン)の仕事を望

んでいることが分かった)。数年間学校に通った後、親も子どもも夢と現実のズレに直面し、がっかりする。

シONDANIはこの問題にどう取り組めばいいのか、頭を悩ませている。既に経済格差による教育格差、またその教育格差が経済格差を再生するという連鎖が始まっている。この問題の解決策としていくつもの選択肢がある。シONDANIが自らの手で現金奨学生や子牛奨学生の教育をするか、長い目で見て社会の底上げのために今のまま奨学金を支給し続けるか、あるいは対象者を中学校段階から高校や大学段階へ拡大するか。それとも社会を引っ張ってくれる中流階層の拡大を目指し、経済力も教育的能力もある子どもにもっとチャンスを与え、それぞれの分野でのリーダーを養成するか。それらのリーダーに国づくりを委託し、開発に力を注いでもらう。そしてその開発によって国家経済や社会が良くなり、国民みんなはその恩恵を受ける。このような考え方はNGO理念から逸脱するといわれるかもしれない。また手をつなぐ会を支援してくださっている会員の皆さんから批判を受け、理解を得られないかもしれない。また奨学金の評価を子どもたちの学業成績だけで行っても良いかという議論もある。

ひとつの社会や国の発展のためにどのような方法がベストか、あるいは近道か、シONDANIも手をつなぐ会も20周年をむかえるに当たって活発に議論し、真剣に考えるべきだと思っている。

(現地訪問報告書に更に少し詳しく書くつもりです。)

初めてのバングラデシュっっっ!!

活動を終えて

蘭田 共喜

今回の現地訪問を終えて、日本では体験できない貴重なことを学びました。

活動に参加するきっかけとなったのは、大学の講義でストリートチルドレンについての NGO 活動を学んだことでした。以前から NGO 活動に興味はあったので、夏休みを利用してバングラデシュ現地訪問に参加を申し込みました。

初めての参加で、たいした知識もなく、私は何の役にも立つことができなかつたと思っています。むしろ彼らから宿題を与えられ日本に持って帰ってきた感じです。

活動を簡単に自分なりにまとめると、カラムディ村の人々は変わろうとしていました。そのために集会や意見交換などをこまめに行い、アイデアを出しあい、村自体にとっても活気がありました。現にラフマンさんやニノ坂さんから聞く限り、活動当初に比べてかなり変わったようでした。次第に変わっていく人々に応えるように、手をつなぐ会の学校建設の費用負担や、子牛の提供、そして、医療協力等これまでの活動が根付いてきているのだということがわかりました。初めて参加した私でしたが素晴らしい活動だと思います。

いろいろな事を考えさせられた。一言でいうと、そんな現地滞在でした。同行してくださったメンバーや支援してくださった会員の皆さんに感謝します。



活動をふりかえって

上野 大輔

今回の活動に参加して、強く感じたことは、日本での「常識」は、国をまたげば通用しないことが多いということです。それは、ダッカに着いた瞬間から感じました。ひとたび空港を出れば、外は物珍しそうに私たちに視線を送る見物人の嵐。さらには、鳴り響くクラクションの嵐。日本にいてはまったく考えられないような事が、この国では日常茶飯事で行われていました。また首都から村に行くと、信じられないような環境の代わり映えでした。本当に同じ国なのかと目を疑ってしまいました。また食生活一つとってもそうです。毎食カレーだと栄養が偏らないのかなと疑問に思っていたのですが、実際に村で食事を取るごとに、実に栄養が取れていることを知りました。今回の活動で学んだことを日本の子どもたちに伝えていければと思います。

行って・見て・分かること

草場 孝仁

帰国後 1 週間を経てもなお、私は今回の旅を総括することができないでいます。むしろその逆で、収斂というよりは拡散、といった具合で「感想を一言で」というのは非常に難しいわけです。使い古された言葉に「旅の終わりは、新たな旅の始まりである」というものがありますが、まさにそれを実感しているところです。唯、私に言えることは「行けばわかるよ」ということぐらいかな。

Bangladesh の写真はどれだけでも手に入れることはできますが、あれは現実を切り取っただけのもの。統計的データで理解は可能ですが、それはあくまで数字とグラフの中の世界。現実はずっともっとダイナミックで、エキサイティングです。そして何よりも、そこには彼らと私の交感があり、そのことで「古い」私自身が音を立てながら破壊されていく。しかも、それは現在進行形で。

自分の価値観が変わっていく「音」が聞きたい方、そんなあなたには最高の旅ですよ。



2006年、夏の現地訪問を終えて

宮崎 智子

初めて Bangladesh に行き、見るもの聞くこと全てが新鮮で刺激的でした。日本とは全く違う環境、Dacca 空港に着いてからサウナに入ったような熱気や人の多さから滞在中は、驚くことばかりでした。村に行くと同じ国と思えないほど建物は異なり、Dacca 以上に日本人というだけで人々が寄ってきて囲まれ、最初はとまどい逃げたばかりでした。けれども日が経つにつれて少しずつ慣れてきました。村の人々は本当に暖かく、子ども達の目が輝いていたのが印象的で忘れられません。又、小学校へ行ったり、高校の開校式、子牛の奨学金を受けている家の訪問に同行して普段できない体験を沢山させて頂きました。日本にいる時は Bangladesh のことなんて全く分からなくて、あまり良いイメージもなかったけれど、実際行ってみると私の想像をはるかに超えていて何も知らなかった自分が恥ずかしくなりました。今回訪問できて本当に良かったと思います。貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。



🌸 初めての海外旅行！

宮崎 晃輔

僕にとって初めての海外、それが今回のバングラデシュ訪問でした。食べ物、生活環境、メンバーとの連携、最初は少し不安もありました。でも終わってみると、視野が広がり、最も充実していて、成長できた10日間でした。

目に入る全てのものが発見・感動で、常識をひっくり返されまくりでした。それは例えばすごく危険な道路や、簡素なつくりの学校、池で入浴する人たちや、物価の低さなど…まだまだ沢山あります。

最も悲しかったことは、バスや車に乗っていて、ものを売りに来る子供や物乞いをする人たちを見たことです。社会格差と同時に、発表されている就学率とのギャップがみえてきて、ショックを受けました。

素晴らしかったことは沢山あります。貧しくても笑顔で暮らす村の人々を見て多くの勇気と元気をもたらしたし、停電のときに見た満天の星空には、開発が進んでいないからこそ目に見えるものがあるんだなあと思い、日本などは開発が進みすぎたために失ったものが山ほどあることに気付かされました。



現地訪問報告会のお知らせ！

今年の現地訪問は、運営委員の二ノ坂代表・ラフマン氏、バングラ初上陸組の5名の若者を加えた7名の訪問団でした。

二ノ坂代表・ラフマン氏からカラムディ村やシオンダニの現状について、そして20代の若者の新鮮な驚きや豊かな感性で感じてきたこと等をお伝えする報告会が下記日程で開催されます。ぜひぜひご参加ください！お待ちしております！

日時：2006年10月1日（日）

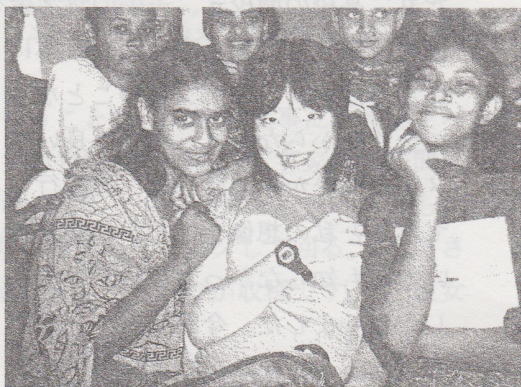
14:00~16:00

場所：福岡市NPOボランティアセンター
「あすみん」

（福岡市中央区大名2-6-46
福岡市青年センター5F）

入場料：無料

資料代：300円



■モーツァルト室内楽の愉しみ

6月18日に開かれた、バングラデシュと手をつなぐ会主催によるチャリティコンサートは、たくさんの方にお越しいただき、開場はほぼ満席となりました。

クラリネット・バイオリン・チェロ・ビオラ・ピアノの三重奏、四重奏、五重奏を愉しみながら、つかの間のひと時を過ごすことができました。演奏者の皆様に感謝いたします。又、コンサート終了後、たくさんの方々から募金を頂き、御礼申し上げます。皆様のご協力を得、滞りなくコンサートが終了しました。

来年も、このようなコンサートが開けたらいいなと思っています。(な)

■会 計 報 告 (2006年8月27日現在)

※ 新会員紹介 (敬称略)

香月悦子 荒木正文 宮崎智子 山崎律子 逸見廣治 上野大輔 菌田共喜
宮崎晃輔

※ 募金者紹介 (敬称略)

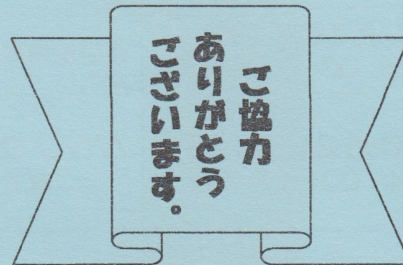
坂本キミ子 長宮和子 佐伯邦男 八木良子 瀬良照子 高崎尚子
松浦孝道 吉川八重子 佐治泰世 堀哲也 長岡正博 木村理恵
福本トシ子 宮坂純子 井沢ふみ子 砥綿とも子 山田栄香 後藤昌子
チャリティコンサート会場にて にのさかクリニック窓口募金箱

※産婦人科病棟建設&設備費募金者紹介 (敬称略)

松尾清美

※旅費のカンパ (敬称略)

林久美子 八木良子 松尾邦子 井上伊磨子
亀山俊子 山下久代 吉川徹 堀哲也
平山正明 宮崎智子 宮崎晃輔 草場孝仁
上野大輔 ニノ坂保喜 菌田共喜



<事務局便り> 暑い暑い夏もやっと通り過ぎたようです。夏バテ対策は、これからではもう手遅れでしょうか？ 日本の今年の夏も暑かったのですが、今年初めてバングラデシュへ行った若者たちは、現地の暑さをどう感じたのでしょうか？皆様是非、報告会会場へ足をお運び下さい。

事務所：電話092(844)1369

これからの行事予定



皆様のご参加をお待ちしています。

日時	内容	場所など
9月17日(日) 12:30~15:30	地球市民どんたく 国際協力セミナー	福岡国際ホール 志賀の間
9月18日(月) 11:00~19:00	地球市民どんたく ブース出店日	福岡市役所西側 ふれあい広場北側緑地
10月1日(日) 14:00~16:00	現地訪問報告会	福岡市青年センター5F あすみん ※資料代300円
10月5日(木) 19:00~	事務局会議	西新事務所
10月8日(日) 14:00~17:00	NGOカレッジ “国際協力がって 何だろう?”	福岡市健康づくりセンター あいれふ 10F ※参加費 1,000円 ※学割有り
10月19日(木) 19:00~	運営委員会	西新事務所
10月21日(土) 14:00~17:00	NGOカレッジ “育てる国際協力”	福岡市健康づくりセンター あいれふ 10F ※参加費 1,000円 ※学割有り
10月28日(土) 14:00~	バザー値付け作業	にのさかクリニック
10月29日(日) 13:00~	バン格拉バザー	にのさかクリニック前 駐車場
12月23日(土) ~30日(土)	スタディーツアー (予定)	バン格拉デシュ カラムディ村

☆変更になる場合もあります。事前にご確認のうえご参加ください。

☆バザー開催に伴い、バザーへの提供品も募集しております。是非、ご協力ください。(問合せ先: 092-872-1136/にのさかクリニック)

